

八 結 婚  
九 その 他

出港、七日舞鶴上陸、八日復員

昭和二十八年三月三十日

新潟県を退職後は余暇を環境省

パークボランティアとして現在

まで二十年余活動を続けている。

(新潟県 柴沢 正雄)

私のシベリア抑留記

愛知県 中 根 昭 二

私は名峯三河富士として知らるる村積山の麓、岡崎市奥山田町で昭和二（一九二七）年二月六日に生れ、昭和十八年十二月に県立岩津農学を繰り上げ卒業し同校の助手として採用され奉職していたが、戦雲急を告げ、にわかには戦況も激しさを増す中、昭和十九年八月十五日に陸軍特別幹部候補生に志願し、浜松航空隊中部第九十七部隊に入隊する事となった。六カ月の初年兵教育を終え満州に配属命令が下った。

昭和二十年一月十二日に浜松を出発する事となった。最後の面会が許され早速実家へ連絡をとった。実家では物資の乏しい中工面して色々なものを持ってきてくれた。餅とかおはぎのたぐいは當時は貴重な存在であった。農家という事でたくさん作ってきてくれたので大好物を腹いっぱい食べ、

戦友達にも分けてやった。父が餞別として五十円渡してくれた。当時我々の給料が月額九円五十銭である事を思えば五十円はまさに大金であった。

当時軍の秘密上我々が近く渡満するということも家族の者に話すことは許されなかった。

しかし国を立つ事くらいは父も分かっていたらしく、予備のお金は上衣の裏に縫って行くがよいと父が教えてくれた。

軍隊内では給料の六割は天引き貯金させられ小遣い銭はきちんと金銭出納簿に記帳し時々点検があるので余分なお金は持たせてはもらえなかった。

いよいよ出発の日が来た。東海道線を西へ下つて下関まで着いた。我々の汽車は軍用列車であるので厳しい警戒体制の中での輸送であった。途中で敵方に情報がキャッチされたとの連絡で、下関と博多間を二回も往復し予定が変更したが博多からやっとの思いで一月十六日に朝鮮の釜山港に到着する事ができた。

そんな具合で警戒と緊張の中で移動せねばなら

ぬので食事が思うように取れず空腹をかかえての上陸であった。

にぎやかな港のあちこちでは十歳ぐらいの子供がするめを売っている。「兵隊さん、するめ買って」「するめ買って」としつこく付きまってくる。

「幾らだ」と聞くと一束二十円だと言う。値段の高いのには驚いたが当時外に何も食べるものは無いので仕方なしにそのするめを一束買う事に決めた。早速父親からもらった五十円に手をつけた。

そしていつときの空腹をしのいでいた。そして我々の配属先である鞍山に着いた。昭和二十年一月二十日で満州での冬の真つ盛りの事で足の爪先が凍るように冷めたい、常時足を動かしていた。

しばらく待っていたら原隊から迎えの人が来て部隊まで案内してくれた。私達の部隊は独立飛行部隊で、内地の司令部から直接命令を受け、速やかに行動をとるという仕組みになっている。独立飛行第八十一中隊と称し、大和田進少佐が指揮をとっていた。同少佐は陸軍士官学校出身で当時二十

五歳でその童顔がにくいほど凛々しく引き締まって見えた。隊長以下二千人ほどで我々特幹生四十人が新しく入隊したがまだ教育中の身の上であった。昭和二十年三月八日第一次下士官教育のため北満の佳木斯野戦航空廠第十一中隊に分遣された。昭和二十年七月二十六日には第二次下士官教育のため公主嶺へ移ったが、戦雲急変し八月九日をもって元隊に復帰する事となった。丁度そのころ元隊は鞍山から新京（長春）に移動していた。

## 終戦

地球は回り時は流れ鐘は鳴り皇国運命の幕は切つて落とされた。時！昭和二十年八月十五日正午の事である。昼夜を分かたず人と人、車と車でうずもれていたにぎやかな新京の町も今日は何となくもの寂しいちぎれ雲が浮かんでいた。「全員正午になったら重大ニュースがあるから舎前の拡声器の前に整列!!」と紅白の週番樟章もいかめしく週番士官のあわただしくも甲高い声が各兵舎の隅々まで響き渡った。「どんな重大ニュースがあ

るのか？」或いは「対ソ激戦に備えて陛下の励ましのお言葉でもあるのでは？」等と皆は一樣に不安と期待を抱きながらラジオの前に心を鎮めた。

ラジオから流れて来る玉音に一同かたずをのんでしばし耳を傾けた。低く強くしんと将兵の胸を突き息を殺して不動の姿勢で張り詰めた緊張の中の一瞬であった。数分で放送は終わったが遠く日本海を渡つて来る電波は雑音に打ち消されるように理解し難いお言葉であった。皆は内容が理解できなかつたので銘々勝手な解釈をめぐらせぼそぼそと話し合っていた。しばらくすると別のラジオから入手したものが玉音放送の真相が明らかになった。そして大和田隊長からの訓示があつた。

「頭―中!!」「直れ!!」隊長はおもむろに口を開けた。「皆んな、心を落ち着けて聞いてくれ。あわてふためいて動揺の余り間違つた行動を取つてはならぬ」と念押しがあり、「我が日本帝国は無条件降伏をした。直ちに忠勇なる将兵は上官の指示に従つて行動せよ」と悲壮な面持ちで命令が出

された。

ここにおいて皇国三千年来の無敵を誇る歴史的皇軍も覆され、大東亜新秩序を目指し一億打って一丸となり、国民皆兵、勝つまでは欲しがりません、と日本の必勝を信じて戦ってきた大和民族も滅亡の波に乗せられ遠い将来は一挙に闇黒の幕に包まれてしまった。

一同はラジオの前で茫然と目頭を押さえ臉を濡らして男泣きに泣いた。「口惜しい!!」「口惜しい!!」「俺は死ぬ」「殺せ!!」「殺せ!!」とげんこつの汗!! 臉の涙!! 「信じられぬ!!」「デマだ!!」「抗戦だ!!」段々と悲鳴の声が出だした。「終戦?」「そんな馬鹿な?」「俺達はまだ一発も弾丸を撃っていないじゃないか!!」「まだ我々関東軍は強いんだぞ」「畜生め!!」呼号する者、号泣する者、興奮の余り狂乱状態であった。

その内に誰かが言った。「おい俺達は今後一体どうなると言うのかな?」「日本は未だかつて負けた事がない、どうなることやらさっぱり分らん」

「我々はソ連の進駐下にあるから捕虜になるならシベリアへ送られるのではないか?」「いやいやソ連なんかほんの一週間足らずの戦いだ、ソ連も不可侵条約を独善的に解約して宣戦布告をして来る悪役者だ」等と勝手に想像してぼやきわめいていた。

敗戦の祖国はどうなっているか? 父母は健在か? 兄は妹は? と自分達の将来を案ずると共に祖国の家族のことも気掛かりでたまらない。

明日はソ連の検閲があるから新京の工業大学へ集合せよとの指示で、満州の各地から各々の部隊が集結した。航空隊、騎兵隊、戦車隊、歩兵隊、工兵隊、衛生隊と、あらゆる部隊がここ工業大学へ集結した。

八月二十日ここで整理して武装解除が行われた。長い間崇敬と信頼の鏡であったはずの菊の御紋章のついた三八式歩兵銃も、帯刀も弾薬も将校の日本刀も、ソ連兵立会いの中で日本軍の武器が山と積まれた。皆んな一列になってソ連戦利品の山へ

放り投げていくのである。この時ほど軍人として口惜しかつた事はなかつた。命の綱とも心の支えともなつてきたこの兵器を没収されるといふことは両腕をもぎ取られる思いで、一瞬足元がぐらつき、前途は暗闇に包まれてしまい一抹の寂しさを覚えた。もう今日からは翼を失つた鳥のようなもので、自分たちの力量は皆無に等しい。

もうこうなれば皆んな元気で国へ帰るまで力を合せて絶対に生き抜かねばならぬと心に決めたのである。今度は混成して新しい部隊が編成された。私は第十一大隊長坂本大尉の一中隊第三小队第二分隊に所属することになった。ヤポンスキーサルダート東京ダモイ（日本兵は東京へ帰るのだ）とソ連兵が言うので、日本内地へ帰るための新編成だと思ひ、長時間待たされソ連の確認点呼に応じていた。

昭和二十年九月十日の新京は快晴であつた、いよいよ今日ここを出て新京駅へ向うという事でカンボーイ（警戒兵）が大勢来て駅まで誘導してく

れた。ここで止まれと言つたので何かなと思つたら、日本軍の糧秣倉庫の方へ連れて行つた。倉庫には白米、小麦粉、バター、水飴等が袋詰めになつてぎつしりあり、この倉庫も既にソ連軍がチェックしていらしい。

この倉庫内にある物資を今から新京駅まで運べという事で、約四キロの道のりを我々の肩で何回も運んだ。「これは日本軍の帰還途中の食糧だ」といふ事で運ばされたが、後で分つた事だが、これはソ連の生活物資及び日本軍捕虜の食糧にも一部当てられていた。皆んな汗とうどん粉で真白になつて疲れ切つて阿呆面して地べたに腰を下ろして休んでいるところをカンボーイ（警戒兵）がえらそうに着剣して我々を見守っている所を新聞記者が写真を撮つて行つた。

「偉大なるソ連軍!! 見よ日本軍もついに我がソ連軍に無条件降伏をした!!」と大きくソ連新聞紙「プラウダ」で報道する事であろう。

写真を撮られて「出発!!」また黙々と食糧の運

搬作業を続行させられた。

今度は毛家頓という所へ向うと聞かされてまた歩いて疲れきった足を引きずって行つた。五里十里、二十里と歩けど歩けど住家無く緑の広野を黙々と歩き続けた。途中で倒れる者、病気で動けなくなる者、お互いに戦友達で励まし合つて歩き続けた。段々と背負い袋の重みが肩に食い込み、我慢ができなくて、石鹼を捨て、靴を一足投げ、洗面具も捨て、少しずつ色々な所持品を減らして行き、その内に米も捨て味噌も捨て、砂糖も塩も生きたるための最小限の必需品まで捨てなければ我が身一つ運ぶのに精いっぱいなところまで来た、連続三十時間の強行軍でたつたの一回しか食事を取ることができなかった。半死半生の思いで毛家頓にたどり着いた。

ここはまた貨物廠だけあつて何でもあつた。

二十年九月五日、ソ連の検閲があり、また新京まで向うということであつた。

照りつける暑さの中、のどが渴いても飲み水は

ない。この貨物廠から大量の物資を全部新京の工業大学まで運ばされた。

九月六日、何万人とも分らない将兵の新編成がなされたのであつた。

そして長いシベリア鉄道の生活が始まつた。車内は二段式になつていて寝る時は隣の人の手足や肩と肩がすれ合うほどの狭さである。まるで鯛かさんまでも並べたように箱詰め輸送である、食事が四日に一度ぐらいで、腹が減つて弱い者は病気になるてしまふ。

苦しかったシベリア鉄道の旅も一カ月で十月二十日の朝が来て、ここで下車するという事である。一体どこまで連れて来られたのか、ここはまた随分暑い。一カ月も風呂にも入らず空腹の明け暮れで、着ているものはシラミの巢のようなもので肌着はシラミの行列でキラキラ光つて見える。体中は赤く変色して、蒸し暑い車内で半病人のような体で清掃を済ませてぶら下がる様に車から降りた。

暑いはずだ住民はターバンを頭に巻きインド人

のような格好をしている。

ここはソビエト連邦ウズベク共和国という地名だった。ここは中央アジアの一角で、パミール高原の砂漠で海拔一千メートルもある高所。北は天山山脈が聳え、南は世界の屋根と言われるヒマラヤ山脈に囲まれ、夏は無風状態で暑く、雨量は非常に少なく飲料水にはほとんど困った。冬は零下三〇度ぐらいに下り、両山の吹おろしが肌身にしみる。えらく遠くまで我々を連れて来たものだと驚き口惜しがったり後悔もした。

今日はこの河原で一晩明かして、ここでまた私物検査をするらしい。

ドイツ人の捕虜達が夕食を運搬して来てくれた。そういえば日本軍より先に降伏したドイツ人が我々の先輩捕虜である。

お粥が飯盒の蓋に一杯とパン一〇〇グラムが与えられた。翌日は私物検査があり、万年筆とか時計のようなものは全部没収され、ソ連将校達のポケットに収まり体裁の良いかっぱらいである。カ

ンボーイ達はパナマ帽に茶褐色の外套を着て、いよいよ今日から収容所に入れるということで、入浴場に連れて行った。

入浴といっても湯船にゆっくり浸るわけでもなく、シャワーで一人洗面器一杯の湯で体を洗った後は真黒な湯になってしまった。

輸送中大量のシラミに悩まされたことを思えば、被服も殺菌してもらえ、有り難いと思った。

ようやく終わったのが午後八時であった。

トラック十数台来て一台に三十人ずつ乗せられ夜道をまっしぐらに走り続けた。一時間ぐらい走ったであろうか、電灯の明りが幾つも見えてきた。ここが我々の収容所である。

いかめしい大きな衛門があり、周囲は鉄条網が頑丈に張り巡らされ、角々には歩哨台があり、歩哨が銃を持って見張っている。

とうとうこんな所へ入れられてしまうのかと思うと急にみじめで情けなくなってきた。

入る時も人員点呼や名簿の照合があり随分待た

された。收容所にはもう既に大勢の日本人がそこで生活を始めていた。皆んな朝まで個人の装具を枕に部屋中でごろ寝である。

兵舎と言っても誠にお粗末なもので、泥煉瓦を積み上げて丸太を上に乗せ、若などで屋根を葺き、その上に泥をかぶせ、壁に小窓をつけガラスが泥で張り付けてあるみずばらしい兵舎ではあるが風雨をしのぐには事欠かない。壁は石灰を水に溶かして箒で何回か塗つてある。

舎内は二段式に寝台が作つてあり一棟で六十人收容できる。ここが我々の巢であり住家なのである。一夜が明けて元の中隊に戻り部屋割りがあった。本来一棟六十人のところ人員が増え一棟で八十人ほどは入る事になり、大変窮屈な思いをした。たまたま強い風が吹くと屋根が飛び空が見える様になると修理し、私達は常に環境の美化に努めた。私達は皆んな体が弱つているので二十日間ぐらひは道路の補修や兵舎の汚れを落としたりして体調が快復してきた。十一月十日、中隊長が皆ん

なを集め「今日から遠方にある工場の方へ作業に行くから一生懸命頑張つてくれ」と言われ、工場の方へ向かった。

その工場は広々と続く砂漠の真中にあり、歩いて六キロあり、路面はセメント粉を敷き詰めた様な細かい埃の様な砂が五センチほど積もつていて、その上を大勢の兵隊達がばたばたと歩いて行くので、砂埃で前を行く者が見えないくらいで人が歩く所が道路であり幅員も何もない。カンボーイも、ひよこを逃した様で目的地まで行くには大変である。私達の食事は少なく、おもゆとお粥とも分らぬほどの燕麦の粉に水をたっぷり入れキャベツの葉っぱの細切れに山羊の肉が二切れに塩分が僅かに入り、どろどろというか、びしょびしょと言うか、飯盒に半分ぐらいが一回の食事である。炊事場で大量に煮立てて飯盒に入れてくれるのであるが、始めと終りでは濃度が違うので配当の順番を代えたりくじ引きで当った飯盒を食べたりした。

そんな物を朝食に頂いて六キロの道のりを歩い

て行くと腹もちが悪く工場に着いたころには腹が減って何も出来ない状態である。

工場に到着すると我々を待ち兼ねていたかのようには、ソ連のナチャニツク（現場監督）が数人いて、それぞれの部所に連れて行く。ナチャニツクはにこにこしながら「コモンジルイエス（隊長はいるか?）」と言うと渡辺小隊長が歩いて行く「レヴオチイエス?（通訳はいるか）」通訳が走り出て行く「ヤアテレヴオツチ（私が通訳です）」「イジゼスマトリー（ここを見給え）」工場内には至る所に幅四メートル深さ二メートルぐらいの溝が掘ってある。このうち大小のパイプが部屋から部屋へ棟から棟へと連結されている。瓦斯、水道、蒸気管の直径一メートルぐらいのパイプもある。それ等のパイプを埋め立てる作業である、この工場もまだ出来て新しい建物である、各所に新しい土が掘り返されていた。

吉田通訳を通じて色々な作業説明を聞いた。この国ではノルマ（固定作業量）というものがあり、

今日の作業量（成績）を%で評価される。その%を収容所に持ち帰り収容所の本部に提出する。本部からは炊事へ連絡が届き、明日の食事の量に影響されるといふ、ソ連独特のシステムになっている。つまり働かざる者食うべからずという共産主義の理念であり第一歩の実行である。今日の昼食は大豆の煮豆が片手のひらに乗るぐらいの量で、塩気も味気も何にも無いものだけだ。しよせん人間扱いの身ではないからと愚痴をこぼしても始まらぬ。皆んなは減り腹にもめげず誠心誠意頑張った。お陰で我が小隊は一〇〇%をもらう事が出来たので明日の食事が楽しみだ。段々と食糧事情が険悪な状態となり腹が減ってトイレに行くのさえふらふらしてしまう。皆んなひもじい思いで毎日を送る。炊事場へ行き残飯をあさる者、他人のパンを盗んで食べる者、まるで乞食か捨て猫のような心境であった。今は今とて何一つ口に入れるものはない、この辛さ病むよりつらい毎日の明け暮れであった。このころでは牛馬の飼葉にまぶす小

麦のから粉が一人茶碗に一杯ぐらいしか与えられない。それを炊事場で大込みに煮立て菜っ葉が浮かんで乾燥トマトのこま切れが少々で塩の薄味と山羊肉が二切れ、馬鈴薯のこま切れが三、四個は入った、びしょびしょが飯盒に半分ぐらいでとても箸では食べられないので、各自手製のスプーンを作つて大事に持ち歩き昼食は現場で食べる。

食べ物の事となると二十代の者も三十代の者もまるで子供の様に餓鬼まる出で喧々囂々げんげんしょうごうでまた楽しい食事でもある。

我々の一日分の食事給与規準は次の通りである。

- 一 黒パン三五〇グラム―患者は四〇〇グラム
- 二 米麦粟いずれかで四五〇グラム
- 三 魚六〇〇グラム（魚の無い時は穀類五〇グラム増）
- 四 肉一二〇グラム（肉の無い時は穀類五〇グラム増）
- 五 砂糖一八グラム（砂糖の無い時は穀類五

〇グラム増）

六 塩一〇グラム（漬物が入荷の時は塩が少  
ない）

七 油二〇グラム（肉の無い場合油の増量）

八 野菜六〇〇グラム（乾物の場合は十分の

一）

九 お茶五グラム

こんな具合で営内入荷があるが、当時はまだ旧軍隊の制度があり、将校食と言つて特別待遇で食事を作つていた。また時々ソ連兵が炊事場へ入り肉の一かたまりを持って出て行くが、日本兵の炊事係の者は見て見ぬふりをしていなければいけない、苦しい立場である。

この收容所では入所当時暑さのため大勢の患者が出た。また栄養失調のため死亡者も続出し体調も崩れ病人を続出した事があつたのでこの收容所に医務室ができたが、注射器一本有るわけでもなく、血圧計や心電図がある訳でもない。ただ日本軍から持ってきた体温計が二、三本有つたのみで

ある。ソ連の軍医と日本軍医が立ち合いで月一回健康診断をしてくれるが下痢と熱発だけは患者として認められるが、その他の病名は一切認められなかった。聴診器を当てるわけでもなく血圧も脈拍も計るわけでもない。

肉の付き具合と皮の張り具合だけでチェックする。

- 一級 身体強健にして重労働に適す
- 二級 身体普通で通常の作業に適す
- 三級 身体虚弱で軽作業可
- 四級 病弱者で作業不可

これだけの診断がいつも簡単に片付けられていく、これは我々の体の事を思つて情け心でやつてくれるのではない。

この人間動物をいかに安い飼代でどれだけ酷使できるかの目安に過ぎない。一番困つた事は足の関節の痛みや歯痛の悩みであった。内臓系統の異状や痛みは全然認めない。ソ連医はただ横着で怠け者ぐらいに思っている。

私も一度歯痛で苦しみ小隊長から願つてソ連の軍医に診てもらつたが作業は休ませてくれなかつた。仕方なしに戦友達と現場まで行き、戦友達の同情にすぎり休ませてもらつた。ノルマーは人員で割るので私も作業した事になり、戦友達には大変迷惑をかけた事になつた。

今まで土方工事をやらされていたが、今度は割り作業に回された。

四人一組になつて先の尖つた鉄棒を打ち込み一メートルぐらいの穴を掘るのである。日影もない暑い太陽の日差しを受けながら、汗びっしょりになつて大ハンマーを振り上げ四人で交替しながらやつた。穴を十個ぐらいあけると火薬を詰めて導火線を付けて大きな岩を爆破させる。

大小の小石と砂塵が上空高く舞い上る、それをまた三十センチぐらいの大きさに割り別な所に山積みして置くと現地人が荷馬車で住宅現場まで運んで行く。ソ連では高級な建築資材として使用されているのである。

今度はまたスターリン第一次五カ年計画とてソ連四番目の発電所建設計画が出された砂漠のど真中を通る人工運河の早期完了を目指して拍車がかけられた。その作業に駆り出された。一輪車に土を積んでは運搬する大変な作業である。そして夜間作業もあり昼となく夜となく交替で作業をする大変苦しい作業であった。運河の建設作業は昼となく夜となく毎日繰り返され続けている、何千の将兵は今土との戦いである。歓呼の声に送られて勇んで国を出たけれど何でこんな仕事をしなければならぬのか？

このころスターリンの威力は飛ぶ鳥も落とさぬばかりの勢いで、スターリンはソ連の神様ぐらいであり、我々の収容所でも共産党教育が盛んに行われテストまであり、成績の良い者から帰国させる、と共産党思想を叩き込むのである。

毎日毎日焼け付くような暑さの中で汗と埃の中で綿のようにぐったり疲れた体を寝台まで運びそのまま横になる誠に不節制な生活の中で何の希望

もなく月日ばかりは流れていく。

我々には毎月十日に月例身体検査があり、体調によつて作業が決まるのである。今日は十日でもないのに急に身体検査があると言うので医務室へ向つた。

各団ごとに整列して呼名点呼をやり身体検査が始まった。私は毎月の検査では二級が多くあまり健康には優れていなかった。

この度の突然の身体検査は我々待望の帰還のための検査であつたようだ。

翌日作業に出かけた。作業場では昨日の検査の状態がどういふ風に今後の運命に展開するの議論論百出、その事で仕事も余り出来なかつた。そしてその夜十二時ごろ帰還者の氏名発表があつた。翌日帰還者は別離され身体検査と私物検査を終え二百人ぐらゐは衣服を揃えて、胸には民主グループの赤いリボンを付けて一人一人別室で口頭試問があつた。例えば

問―ソ連人が日本人捕虜に対して取り扱いは

答—大変親切で行き届いていました

問—食糧はどう感じたか

答—大変多くておいしく頂きました

問—被服は行き届いていたか

答—大変行き届いていました

問—ソ連の社会主義機構をどう思うか

答—非常に進歩的で民族平等男女同権等、特に

賛美するところであり、日本も見習いたい

と思います。

こんな具合でソ連の引け目を感じる事ばかりを質問するので反対の事を述べておけば間違いないと思った。我々には帰還という重大な事がぶら下がっている。この試問で期間延期だ等と言われたら元も子もない。

こうして全検査を終えた者は残留組の者とは一切談話を交してはならない事になっていた。

翌日トラックに分乗してこの収容所を出発した。約二時間でベグワード駅に着き、また一時間ぐらいでタシケント駅に到着し七月二十二日にナホ

トカに向って出発した。ナホトカ駅には各地から集結して来た先着隊も大勢いた。

ここでは第一収容所から第三まであり、共產教育の仕上げの場所であり、不真面目な者は再びシベリアの奥地に送り返される等と脅され、共産党や労働歌等を元氣いっぱい歌わされたものだ、ナホトカの海を眺めていたらはるかかなたに黒点が見えた。段々大きく近づいてきた。

あれが我々を迎えに来た船であろうと皆んなは棒立ちになつてはしゃいで喜んでいた。

船は碇を下ろし船首に国旗をかかげた。

この時ほど日章旗が美しく神聖に見えた事が無い、船腹には第一大拓丸と日本語で書いてある。待つ事二時間で大拓丸の船上の人となり「スパシ—ボ（ありがとう）」と声を張り上げ手を振った。船内には畳が敷き詰めてあり、ゆつたり足を伸ばして横になった。

二千人の希望を乗せた大魚は飛び魚のごとく塩水を切つて祖国日本へと走り続けた。ああ目がし

みる、胸が詰まる、昭和二十三年七月十八日であった。舞鶴港へ着岸した。

栈橋を下りると日本赤十字の看護婦さん達や元の婦人会の方々も大勢出迎えに来て下さった。

「御苦勞様でした」「御苦勞様でした」と深々と頭を下げ心から私達の帰国を喜んでくれた。

### 【執筆者の紹介】

昭和二年二月六日 岡崎市で出生

昭和十八年 愛知県立岩津農学校卒業

昭和十九年八月 特別幹部候補生として浜松中部九十七部隊に入隊

昭和二十年一月 部隊は満州新京に移駐して、同地で終戦を迎えた

シベリア抑留中は手配にあるごとく苛酷な労働に耐え、昭和二十三年七月二十三日、故郷に復員。

その後、家業のガラ紡工場を経営したり、石工、建築業などを営む、昭和五十六年から会社勤務をし、定年で退職後、農業に従事、現在は週二回の

グラウンドゴルフを楽しんで悠々自適の生活。

昭和六十年にはシベリア抑留生活の「思郷の譜」の自分誌を発行。

(愛知県 河村 広康)